

最新 2026 年 4 月号より抜粋

歌に想いを託し 温もりを込めて送り出す

横浜華僑総会 三八国際婦女節記念講演会

廣東同郷会伊東へ春季温泉旅行 春の休日と桜を楽しむ

福建同郷会会員大会開催

能登震災義援コンサート開かる

孝子賢孫が祖先を敬う 清明節の中華義荘賑わう

要明鶴同郷会 青年部スキー旅行会

華文教育の「新たな 100 年」を目指して 183 丙午の馬年の春節祝賀行事

保育園小紅の卒園式

保育園小紅 入園進級式

中華大厦改修工事 完工

要明鶴帰郷ツアーに参加して (3) 華僑総会理事 楊仕元

歌に想いを託し
温もりを込めて送り出す



3月7日、横浜山手中華学校は2025年度中学部、小学部卒業生送別コンサートを開催した。温かみあふれるステージと入念に準備された演目により、歌声の中で別れと祝福の雰囲気濃厚にたどった。

音楽教師の指導のもと、各クラスは練習を重ね、LED映像と組み合わせることで、観客に視覚と聴覚が融合した音楽の饗宴を届けた。小学1年生から中学3年生まで、生徒たちが順にステージに上がり、歌声で想いを表現し、在校生たちは卒業生への温かい祝福を伝えた。

小学6年生の卒業生は「**明天**」を歌い、成長の思い出と未来への期待を歌声にのせた。

中学3年生の卒業生たちは「**キセキ**」と「**校歌**」を歌い、母校への愛着と感謝の気持ちを表した。会場には馴染み深いメロディーが響き渡り、学校生活の一コマコマを思い出させた。保護者の方々も会場に駆けつけ、拍手の中でこの忘れられない瞬間を見守った。



卒業生各クラスの写真は、学園通信3月号に掲載されています。

横浜華僑婦女会

三八国際婦女節記念講演会

一般社団法人横浜華僑婦女会（黄巧玲会長）は、3月9日に東京華僑総会顧問の江洋龍氏をお迎えして、三八国際婦女節記念講演会を開催した。講演のテーマは『華僑総会と中日友好』、1945年の大戦終結以降に、日本では台湾省出身の華僑の割合がなぜ多かったのか、また、台湾省出身華僑が華僑総会設立に大きな役割を果たしたこと、日中友好協会は日本の友



好人士と華僑が協力して設立されたことなど、戦後から中日国交正常化までの苦難と奮闘の歴史をわかりやすくお話いただいた。その時々 の出来事を経験された方々には過去の記憶から、点と点が現代に繋がり、当時の躍動感あふれる華僑界を彷彿させる内容であり、国交正常化以降しか見聞きしていない世代にとっては、婦女会の創立時に大いに尽力いただいた方々が東京華僑総会創設に参加されていたり、とても身近な歴史として、感銘を受けた講演会となった。

(婦女会)

廣東同郷会伊東へ春季温泉旅行 春の休日と桜を楽しむ

一般社団法人廣東同郷会（朱銘江会長）は3月29日～3月30日にかけて、伊豆伊東へ泊二日の温泉旅行会を挙 行した。今回の旅行会には下は小学生から上は94歳の長老 会員に至る同会の会員と家族ら総勢95名が参加した。

3月29日（日）午後、参加者は三々五々宿泊地である 静岡県伊東市の「伊東温泉ホテルラヴィエ川良」に到着し、お のおの受け付けを済ませ、温泉に浸かったりホテルの周囲を河原に 咲く桜を鑑賞したり思い思いの時間を自由に過ごした。

同日午後時六時、同ホテル大宴会場に参集したすべての参 加者は特設舞台に勢揃いし、記念写真に納まった。その後、同 会尹星副会長の司会で、懇親の為の宴会が始まった。

冒頭、主催者を代表して朱銘江会長があいさつし、「今回の温泉旅行会に百名近い会員と家族が参加してくれたことを 嬉しく思う」と語り、「廣東同郷会の行うもろもろの行事を通じて同郷の絆を強め、会員同士の親睦を深めていこう」と呼びか けた。

続いて、陸煥鑫終身名誉会長が乾杯の音頭を取り、参加者の健康を祝して祝杯を挙げ、宴会は始まった。 この日用意された宴会メニューは、生アワビの姿焼きレモンバター風味、牛肉と海鮮の鉄鍋焼き、そして季節の天ぷらなどの温 泉地ならではの山海の珍味がテーブルを賑わした。

宴が始まり参加者がほろ酔い気分になったころ、同会場内で恒例のカラオケ大会が始まり、歌声に自信の有る者も無い者 も、そのご自慢ののどを唸らせ、思い思いに中国語、日本語、英語の歌を披露した。また、歌に合わせて舞台の上下の広いス ペースで踊りだす参加者も現れ、和やかで温かみのある微笑ましい懇親の会となった。

午後八時、符順和副会長が閉会の辞を述べ、合わせて細かな注意事項などを全員に伝え懇親のための宴会はお開きと なった。

翌日は早春の伊豆の休日の旅の思い出を胸にそれぞれが帰路についた。

(廣東同郷会)



福建同郷会会員大会開催

横浜福建同郷会は2月25日（水）、ローズホテルココハマで新春会員大会を開催した。横浜華僑総会陳宜華会長が来賓代表としてあいさつした。

参加者は5月に下呂温泉で行われる全国大会への期待で盛り上がった。



能登震災義援コンサート開かる

2月25日（水）横浜みなとみらい小ホールにて能登半島震災義援チャリティーコンサート「うたの架け橋ソロからハーモニ―日中合唱交流会」が開催された。

「BOSCO混声合唱団」、「華韻合唱団」、「茉莉花女声合唱団」、「三年一班」の四団体と日本の音楽大学で学ぶ中国人留学生たちが参加した。

「BOSCO混声合唱団」。谷川俊太郎の「かなしみはあたらしい」を披露した。「BOSCO」は町田市で活動する日本人合唱団で創立30周年を迎える。指揮者の松原さんとはジョンハオさん、茉莉花とともに音楽を通しての交流がある。



華韻合唱団は2007年に結成した女声合唱団で華僑の団結、日本との絆を深めることを目的としている。「台北的天空」、「世界の約束」などを歌った。

茉莉花女声合唱団はあいにくの少人数編成であったが、弓田先生の指揮、長尾先生のピアノに支えられ、「萱草花」、「大魚」などを歌った。華韻合唱団と茉莉花女声合唱団は共に横浜中華街で活動しているが今回初めて同じ舞台上立った。

「三年一班」はジョンハオ氏の呼びかけで結成された混声合唱団で、団のテーマは「誠実・友情・調和」。団員30名におよぶ大合唱団で「越人歌」、「城南送別」などを堂々と披露した。また、この交流会の運営もこの合唱団が担った。

この日はほかに、在日音大留学生によるオペラアリアや中国歌曲も演奏され、客席からは盛大な拍手が送られた。外は2月の冷たい雨が降っていたが、心温かい中日合唱交流の合唱祭であった。

（茉莉花）

孝子賢孫が祖先を敬う 清明節の中華義荘賑わう

4月5日、二十四節気の清明節を迎えた横浜市中区大芝台の中華義荘は多くの家族連れなどの参拝客で賑わった。公益財団法人中華義荘主催の「清明読経供養式」が午前11時に開催され、本会から陳宜華会長が参列し、義荘内の地藏王廟などで行われた祭祀活動に参加した。

また、一般社団法人廣東同郷会、廣東要明鶴同郷会、一般社団法人廣東會館倶楽部なども、理事らが集い、それぞれ祭祀を行い華僑の先達を偲んだ。この日は好天にも恵まれ、義荘内の桜も満開となり、新緑の春を楽しむ絶好の「踏青（春の郊外散策）」日和にもなった。清明節は、中国を中心に東アジア各地で行われる先祖供養の日で、寒い冬が終わり、春を祝いながら先祖を偲び、家族の絆を確かめる日にもなっている。



要明鶴同郷会 青年部スキー旅行会

広東要明鶴同郷会（陸佐光会長）は3月26日、27日の両日、恒例となったスキー旅行会を実施し、小学生から80代までの会員関係者、総勢43名の参加があった。今年は初めて中華街から大型バスで目的地の竜王スキーパーク（長野県）までを往復するバスツアーであったが、出発当日に迎えに来るはずのバスにトラブルが発生し、30分以上遅れての出発となった。スキー場到着後、ホテルまでは雪上車で移動、車内は天井が低く、圧迫感はあったが、ほぼ全員初めての体験を楽しんでいた。



スキーパークには1メートル以上の積雪があったが、初日はあいにく霧がかかって視界が悪く、参加者は気をつけながらスキー、スノーボードを楽しんだ。夕食後には大カラオケ大会や卓球など、それぞれが大いに楽しんで一日目が終了した。

二日目は朝から快晴で、スキー、スノーボードをしない参加者はゴンドラに乗り山頂へ。雪山の素晴らしい景観を眺めながらゆったりした気分浸っていた。午後2時には雪上車でホテルを後にした。帰路はあいにく渋滞にはまり午後9時ごろようやく横浜に帰着した。バスでの往復は時間通りにいかないことが課題だが、途中休憩や買い物のできたので、参加者には楽しい旅行会になったと喜ばれた。

（要明鶴同郷会）

華文教育の

「新たな100年」を目指して 183

丙午の馬年の春節祝賀行事

2月14日、本校では丙午の馬年の春節祝賀行事が盛大に開催されました。春節は中華民族にとって重要な伝統的な祝日であり、団欒、幸福、そして希望を象徴しています。2月に入ると、全校の教職員と生徒たちは準備作業に取り組み、校内の飾り付け、餃子の包み、演目のリハーサルなどを行いました。校内は提灯や飾り付けで彩られ、春節ならではの賑やかな雰囲気漂っていました。

当日午前8時50分、餃子作り活動が幕を開けました。4年生以上の生徒は自分で作り、低学年の生徒は高学年の生徒の助けを借りて一緒に完成させました。一つひとつ形が異なる餃子は、子供たちの新年への祝福と期待を込めたものでした。

春節祝賀会が6階の体育館で開催され、張岩松校長が挨拶を行い、招待を受けて来校した退職教員を紹介すると、全校の教職員と生徒が彼らに祝日の挨拶を送り、会場は温かい雰囲気に包まれました。祝賀会の演し物が次々と披露され、民族楽団による『賽馬』『灯火の中の中国』の演奏、パンダ幼稚園の園児たちによるダンス『草原の小さな駿馬』、『カンフーベイビー』、京劇チームによる『龍宮の騒動』、武術チームによる『中華武魂』、そして中学部のダンス『提灯と飾り』が、次々と拍手を浴びた。フィナーレを飾った『龍獅醒春』は会場の雰囲気を最高潮に盛り上げ、獅子舞が観客席の間を駆け巡り、会場全体が沸き立ちました。

（山手中華学校）



保育園小紅の卒園式



桜が咲き始めた3月21日(土)、2025年度保育園小紅の卒園式が執り行われ2歳児小花猫クラス14名の子どもたちが、保育園小紅から新しい幼稚園や保育園に巣立って行きました。

当日は、横浜華僑総会 会長陳宜華様、横浜華僑婦女会会長 黄巧玲様、横浜山手中華学園理事長 繆雪峰様、横浜山手中華学校校長 張岩松様、熊猫幼稚園園長 羅順英様、横浜華僑小紅の会名誉顧問 劉燕雪様、理事長佐久間愛玲様にご来臨頂き、卒園児保護者の皆さまと共に子どもたちの成長した姿に大きな拍手を送っていただきました。

式典では、卒園児一人ひとりが名前を呼ばれ修了証書を受け取り、卒園のうた「夢わかば」を全員で歌い会場は和やかな雰囲気になりました。

(小紅)

保育園小紅 入園進級式



4月1日(水)、2026年度保育園小紅の入園進級式が開かれ、この春卒園した子どもたちの植えた可愛いチューリップが小紅の子どもたちを出迎えてくれました。

今年度は0歳児クラス3名、1歳児クラス4名のおともだち合わせて7名の新入園児を迎え、進級児19名を含め、26名での保育がスタートしました。

入園進級式には新入園児の保護者の方々が参加し、進級児がお祝いの歌「チューリップ」「拍手」を元気な声で歌って歓迎しました。

翌日より、新入園児の慣らし保育と進級児の新しいクラスでの生活が始まりました。子どもたち一人ひとりに寄り添い新しい環境に慣れ親しみ、保護者の皆さまが安心してお仕事に励まれますよう、職員一同保育に努めて参ります。

(小紅)

中華大厦改修工事 完工

横浜華僑総会が入居する中華大厦は、昨年大掛かりな改修工事を終え、総会の事務部門の機能を1階から2階へ移転しました。新しいオフィスの様子をご紹介します。お近くにお越しの際はぜひお気軽にお立ち寄り下さい。



会議室



インターホーンで受付カウンターへ



正面左の階段を上って2階事務所へ

要明鶴帰郷ツアーに参加して

(3) 華僑総会理事 楊仕元

8月12日、午前、鼎湖山景区に向かう。ここは一九五六年に中国最初の自然保護区に指定され、中国科学院に属する唯一の自然保護区で、華南植物園の管理下に入っています。地区全体がほとんど山地と丘陵で、山並みは南西から北東へ向かって次第に低くなり、最高峰の「鷄籠山」の標高が一〇〇〇メートル、最低地の標高が一四メートル、高低差が実に九九〇メートル。この地は生物多様性に富み、生物学者からは「種の宝庫」、「ジーン（遺伝子）バンク」と称されている。植生が極めて豊であるのも特徴の一つで、森林被覆率が79%近くに達し、北回帰線（北緯二三度）の南にあって日照が充分、雨水もたっぷりです。鼎湖山景区は極めて珍しい存在であり、「北回帰線砂漠地帯のオアシス」と称されています。われわれはカートに乗っての気楽な登山でしたが直前前に大雨が降って水害が起こりました。山の上から蝴蝶谷を見下ろすと、四方を山に囲まれたすり鉢状に見えて、雨が降れば四方の山から水が直にそこへ流れ込み、一気に水かさが増して、災害をもたらすというわけです。

近くの宝鼎園では「天下第一大鼎」と称される九龍青銅宝鼎に出くわし、口径5.58メートル、高さ6.68メートル、重量16トンという偉物に圧倒されました。次に、包公（包拯、包青天、北宋の公明正大な裁判官）聖像を横目で見ながら、観硯亭にある一枚岩のバカでかい硯に気を取られました。重さ2トン、幅2.17メートルの端溪龍皇硯は、岩石丸ごと一枚で製作されたもので、さまざまな姿かたちの水龍、雲龍あわせて一〇八匹が周りに彫られている。石眼（後述）のある硯は上物と言われ、この硯にも138個もの石眼があり、すべて一匹一匹の龍の体の上に配されるようにデザインされて、まるで百龍が珠を弄ぶような見事な場面を見せています。さて、どれぐらい大きな筆に墨汁を含ませることができるのだろうと、また妄想してしまいました。

山を下りた後、栄華酒楼で昼食を取り、ここでは、招牌金沙鷄（手羽のから揚げ）、清蒸龍躉（long4 dan2）、白灼猪蹄（モモ肉の水煮）、田園季節野菜が心に残りました。食後に七星岩へ向かいました。七星岩は幼いころに大人たちの会話の中で時折登場していたのを耳にしていたので、印象深くしていました。この地は遥か昔からよく知られていたようだが、一定規模の景勝地として本格的に開発が始められたのは、民国時代の1930年代初めでした。ここは人工湖の泊星湖ダ



七星岩

ムの中に、カルスト地形の岩山が七つ立っているのが最大の特徴で、北斗七星にちなんで七星岩と呼ばれる所以でもあります。石灰岩の岩山の頭がみな丸いドーム状になっているのは、浸食が相当に進んでいるよううかがわれます。岩山にはそれぞれ名が付けられており、われわれは「石室岩」へ向かいましたが、北入り口から長い橋を渡っている間、欄干寄りに歩いていると水中に黒い魚群が追ってくるのが見えました。振り返ると橋のたもとには餌売り場がありました。そして「石室岩」の下にある洞窟に入りました。常識的にはこれは鍾乳洞にあたりますが、洞窟を進めど進めど一向に鍾乳石、石筍など見当たりません。ツララの痕跡がぶら下がっていたり、石の腰掛に見えたりするのは石筍のなれの果てか。足元ではチョロチョロ水が流れているところ、池になっているところ、ご丁寧に首をもたげた石彫りの亀も置いてありました。この石室洞は他の洞窟よりも最も早く開かれたもので、見どころも最も多く、岩壁に刻まれた唐時代の李邕の《端州石室記》が最も有名で、外にも歴代の石刻が630余幅あり、千年詩廊との誉を戴いている。「天然宮殿」と刻まれていたこの場所は珍しく開口部があり、そこから外の絶景が眺められました。

肇慶はその昔端州と称されていました。この地で生産される文房四宝（筆墨紙硯）の一つ、硯を端溪硯と言って今なお珍重されています。端（溪）硯の始まりは、唐朝武徳年間とされ、1300年余の歴史を刻んでおり、そのころからすでに皇室への献上品となっていました。端硯石の採掘坑口はこの辺りで新旧あわせると約42カ所あり、七星岩背後の北嶺山一帯にも、東西3キロにわたって幾つも分布している。

一行はこの端硯の展示場にも案内され、暫らく観覧することができました。普段目にする硯と言えば、方形か長方形の平たい黒い石の塊を思い浮かべるが、ここに並べられているのは、大小、形、意匠が実に多様であるのが一目でわかりました。端硯は概ね紫硯、緑硯、白硯に分けられますが、黒色に見えるのが紫硯で、石の中に淡緑色の斑点など芯円のあるものを「石眼」（前出）という。猫や鳥の眼によく似ていることからこの名が付いたのだが、鉄を含んだ結核体であって、岩石生成過程で絶えず変化し、周りに幾重もの暈（かさ）ができたものがある。硯の最も大事なところは墨をする面、これを墨堂と言いますが、採掘された原石からこれを見極めて彫りだし、さらに石の紋理や石眼の現れ方などを予想・考慮しながら、周りに様々な装飾を考案し、そして彫刻を施す。端硯の価値はもちろん、これによって擦りあがった墨が最高のものであること、次に実用面とは別に、精巧な彫刻、色合い、模様の美しさなど、美術、芸術の域にある価値、さらに作られた年代による骨董的価値が加わります。文人墨客や愛好家などにしてみれば、それをそこに置いてただ眺めているだけでも無上の愉悦を覚えるでしょう。ここに展示された硯は、一枚として同じものはないと信じてもおかしくないと、筆者は思っています。

さらに驚かされたのは、白い硯があったことです。聞いたこともなければ見るのも初めての白端硯は、ひときわ目立って視野に入りました。雪のように真っ白のものから薄い象牙色、ほんのり灰色がかったもの、さまざまではあるが、これで墨を擦ると薄汚れてしまうのではないかと考えるのは凡人の浅はかさ。詩や書などの添削、評点をするのに朱を入れる際に使うのだそうですが、朱に交われば赤くなる、と思うのも愚の骨頂か。残念ながらこの白い原石を産する唯一の坑口は、現在観光地となった七星岩の中にあるため、採掘禁止になってしまいました。新しい白端硯は今後見ることはできないでしょう。いずれにしても、ともかく久々に束の間の眼福に与かることができました。

日暮れどきに高明区西安洗村にある盈香生態園内の餐飲部で夕食を取るようになりました。凌雲山の麓に広がるここは東京ディズニーランドの四倍の二〇〇ヘクタールもある一大行楽地で、食事はそれまでの粵菜とは趣を異にして、主菜はアジの開きならぬ子ヒツジの開きの丸焼き（盈香烤全羊）でした。焙り上げるのに四、五時間もかかる手の込んだ一品、ヒツジ特有の臭みもなく、こんがり黄金色に焼きあがった肉の塊は皮がパリパリ、肉は柔らかく、独特の風味で素晴らしく美味しい。それにレンコン入りの羊頭スープ、細切り大根と羊臓物の煮込みなどとヒツジづくしでした。

（つづく）